

# 牛をつないだ樁の木

新美南吉

青空文庫



山の中の道のかたわらに、椿の若木がありました。牛曳きの利助さんは、それに牛をつなぎました。

人力曳きの海蔵さんも、椿の根本へ人力車をおきました。人力車は牛ではないから、つないでおかなくつてもよかったです。

そこで、利助さんと海蔵さんは、水をのみに山の中にはいつてゆきました。道から一町ばかり山にわけいったところに、清くてつめたい清水がいつも湧いていたのであります。二人はかわりばんこに、泉のふちの、しだやぜんまいの上に両手をつき、腹ばいになり、つめたい水の匂いをかぎながら、鹿のように水をのみました。はらの中が、ごぼごぼいうほどのみしました。

山の中では、もう春蟬が鳴いていました。

「ああ、あれがもう鳴き出したな。あれをきくと暑くなるて。」  
と、海蔵さんが、まんじゅう笠をかむりながらいいました。

「これからまたこの清水を、ゆききのたんびに飲ませてもらうことだて。」

と、利助さんは、水をのんで汗が出たので、手拭いでふきふきいいました。

「もうちと、道に近いとええがのオ。」

と海蔵さんがいいました。

「まったくだて。」

と、利助さんが答えました。ここの水をのんだあとでは、誰でもそんなことを挨拶のようにはいいあうのがつねでした。

二人が椿のところへもどつて来ると、そこに自転車をとめて、一人の男の人が立っていました。その頃は自転車が日本にはいつて来たばかりのじぶんで、自転車を持っている人は、田舎では旦那衆にきまつていました。

「誰だろう。」

と、利助さんが、おどおどしていいました。

「区長さんかも知れん。」

と、海蔵さんがいいました。そばに来てみると、それはこの附近の土地を持っている、町の年とつた地主であることがわかりました。そして、も一つわかったことは、地主がか

んかんに怒おこっていることでした。

「やいやい、この牛うしは誰だれの牛うしだ。」

と、地主じぬしは二人ふたりをみると、どなりつけました。その牛うしは利助りすけさんの牛うしでありました。

「わしの牛うしだかのイ。」

「てめえの牛うし? これを見みよ。椿つばきの葉はをみんな喰くつてすっかり坊主ぼうずにしてしまったに。」

二人ふたりが、牛うしをつないだ椿つばきの木きを見みると、それは自じてん転ん車しゃをもった地主じぬしがいったとおりで

ありました。若い椿わかつばきの、柔やわらかい葉ははすっかりむしりとられて、みすばらしい杖つえのような

ものが立たっていただけでした。

利助りすけさんは、とんだことになったと思おもつて、顔かおをまっかにしながら、あわてて木きから綱つな

をときました。そして申もうしわけに、牛うしの首くびつたまを、手綱たづなでぴしりと打うちました。

しかし、そんなことぐらいでは、地主じぬしはゆるしてくれませんでした。地主じぬしは大人おとなの利助りすけ

さんを、まるで子供こどもを叱しかるように、さんざん叱しかりとばしました。そして自じてん転ん車しゃのサドル

をパンパン叩たたきながら、こういいました。

「さあ、何なんでもかんでも、もとのように葉はをつけてしめせ。」

これは無理むりなことでありました。そこで人力じんりきひ曳ひきの海蔵かいぞうさんも、まんじゅう笠がさをぬ

いで、利助さんのためにあやまつてやりました。

「まあまあ、こんどだけはかにしてやつとくんやす。利助さんも、まさか牛が椿を喰つてしまつとは知らずにつないだことだで。」

そこでようやく地主は、はらのむしがおさまりました。けれど、あまりどなりちらしたので、体がふるえるとみえて、二、三べん自転車に乗りそこね、それからうまくのつて、行つてしまいました。

利助さんと海蔵さんは、村の方へ歩きだしました。けれどももう話をしませんでした。大人が大人に叱りとばされるというのは、情けないことだろうと、人力曳きの海蔵さんは、利助さんの気持ちをくんでやりました。

「もうちつと、あの清水が道に近いとええだがの才。」  
と、とうとう海蔵さんが言いました。

「まつたくだて。」  
と、利助さんが答えました。

海蔵さんが人力曳きのたまり場へ来ると、井戸掘りの新五郎さんがいました。人力曳きのたまり場といつても、村の街道にそつた駄菓子屋のことでありました。そこで井戸掘りの新五郎さんは、油菓子をかじりながら、つまらぬ話を大きな声でしていました。井戸の底から、外にいる人にむかつて話をするために、井戸新さんの声が大きくなつてしまつたのであります。

「井戸つてもなア、いったいいくらくらいで掘れるもんかい、井戸新さ。」

と、海蔵さんは、じぶんも駄菓子箱から油菓子を一本つまみだしながらききました。

井戸新さんは、人足がいくらいくら、井戸囲いの土管がいくらいくら、土管のつぎめを埋めるセメントがいくらと、こまかく説明して、

「先ず、ふつうの井戸なら、三十円もあればできるな。」

と、いいました。

「ほ才、三十円な。」

と、海蔵さんは、眼をまるくしました。それからしばらく、油菓子をぼりぼりかじつていましたが、

「しんたのむねを下りたところに掘つたら、水が出るだろうかなア。」

と、ききました。それは、利助さんが牛をつないだ樁の木のあたりのことでありました。

「うん、あそこなら、出ようと、前の山で清水が湧くくらいだから、あの下なら水は出ようが、あんなどころへ井戸を掘つて何にするや。」

と、井戸新さんがききました。

「うん、ちつとわけがあるだて。」

と、答えたきり、海蔵さんはそのわけをいいませんでした。

海蔵さんは、からの人力車をひきながら家に帰つてゆくとき、

「三十円な。……三十円か。」

と、何度もつぶやいたのでありました。

海蔵さんは藪をうしろにした小さい藁屋に、年とつたお母さんと二人きりで住んでいました。二人は百姓仕事をし、暇なときには海蔵さんが、人力車を曳きに出たのであります。

夕飯のときに二人は、その日にあつたことを話しあうのが、たのしみでありました。年とつたお母さんは隣の鶏が今日はじめて卵をうんだが、それはおかしいくらい小さかつ



たこと、背戸の椽の木に蜂が巢をかけるつもりか、昨日も今日も様子を見に来たが、あんなところに蜂の巢をかけられては、味噌部屋へ味噌をとりによくときにあぶなくてしようがないという話を話しました。

海蔵さんは、水のみについている間に利助さんの牛が椿の葉を喰ってしまったことを話して、

「あそこの道ばたに井戸があつたら、いいだろにの才。」と、いいました。

「そりや、道ばたにあつたら、みんながたすかる。」

と、いつて、お母さんは、あの道の暑い日盛りに通る人々をかぞえあげました。大野の町から車をひいて来る油売り、半田の町から大野の町へ通る飛脚屋、村から半田の町へにかけてゆく羅宇屋の富さん、そのほか沢山の荷馬車曳き、牛車曳き、人力曳き、遍路さん、乞食、学校生徒などをかぞえあげました。これらの人ののがちようどしんたのむねあたりで乾かぬわけにはいきません。

「だで、道のわきに井戸があつたら、どんなにかみんながたすかる。」  
と、お母さんは話をむすびました。

三十円くらいで、その井戸が掘れるということを、海蔵さんが話しました。

「うちのよな貧乏人にや、三十円といや大した金で眼がまうが、利助さんこのよな成金にとつちや、三十円ばかりは何でもあるまい。」

と、お母さんはいいました。海蔵さんは、せんだつて利助さんが、山林でたいそうなお金を儲けたそうなきいたことをおもいだしました。

ひと風呂あびてから、海蔵さんは牛車曳きの利助さんの家へ出かけました。

うしろ山で、ほ才ほ才と梟が鳴いていて、崖の上の仁左工門さんの家では、念仏講があるのか、障子にあかりがさし、木魚の音が、崖の下のみちまでこぼれていました。もう夜でありました。行つてみると、働きの者の利助さんは、まだ牛小屋の中のくらやみで、

ごそごそと何かしていました。

「えらい精が出るの才。」

と、海蔵さんがいいました。

「なに、あれから二へん半田まで通つての才、ちよつとおくれただてや。」

といいながら、牛の腹の下をくぐつて利助さんが出て来ました。

二人が縁ばなに腰をかけると、海蔵さんが、

「なに、きよしのしんたのむねのことだがの才。」

と、話はなしはじめました。

「あの道みちばたに井戸いどを一つ掘ほつたら、みんながたすかると思おもうがのオ。」  
と、海蔵かいぞうさんがもちかけました。

「そりや、たすかるのオ。」

と、利助りすけさんがうけました。

「牛うしが椿つばきの葉はをくつちまうまで知らしらんどつたのは、清しみず水みづが道みちから遠とすぎるからだのオ。」

「そりや、そうだのオ。」

「三十円えんありや、あそこに井戸いどがひとつ掘ほれるだかのオ。」

「ほオ、三十円えんのオ。」

「ああ、三十円えんありやええだけな。」

「三十円えんありやのオ。」

こんなふうにいっていても、いつりすけころ利助りすけさんが、こちらこころの心こころをくみとつてくれないの  
で、海蔵かいぞうさんは、はつきりいつてみました。

「それだけ、利助りすけさ、ふんぱつしてくれないかオ。きけば、お前まえ、だいぶ山さん林りんでもうか  
つたそうだが。」

利助<sup>りすけ</sup>さんは、いままで調子<sup>ちようし</sup>よくしゃべっていましたが、きゆうに黙<sup>だま</sup>ってしまいました。そして、じぶんのほつぺたをつねっていました。

「どうだエ、利助<sup>りすけ</sup>さ。」

と、海蔵<sup>かいぞう</sup>さんは、しばらくして答<sup>こた</sup>えをうながしました。

それでも利助<sup>りすけ</sup>さんは、岩<sup>いわ</sup>のように黙<sup>だま</sup>っていました。どうやら、こんな話<sup>はなし</sup>は利助<sup>りすけ</sup>さんには面白<sup>おもしろ</sup>くなさそうでした。

「三十円<sup>えん</sup>で、できるげながのオ。」

と、また海蔵<sup>かいぞう</sup>さんがいいました。

「その三十円<sup>えん</sup>をどうしておれが出<sup>だ</sup>すのかエ。おれだけがその水<sup>みず</sup>をのむなら話<sup>はなし</sup>がわかるが、ほかのもんもみんなのむ井戸<sup>いど</sup>に、どうしておれが金<sup>かね</sup>を出<sup>だ</sup>すのか、そこがおれにはよくのみこめんがのオ。」

と、やがて利助<sup>りすけ</sup>さんはいいました。

海蔵<sup>かいぞう</sup>さんは、人々<sup>ひとびと</sup>のためだということ、いろいろと説<sup>と</sup>きましたが、どうしても利助<sup>りすけ</sup>さんには「のみこめ」ませんでした。しまいには利助<sup>りすけ</sup>さんは、もうこんな話<sup>はなし</sup>はいやだというように、

「おほか、めしのしたくしろよ。おれ、腹がへつとるで。」  
と、家の中へむかつてどなりました。

海蔵さんは腰をあげました。利助さんが、夜おそくまでせつせと働くのは、じぶんだけのためだということがよくわかったのです。

ひとりで夜みちを歩きながら、海蔵さんは思いました。——こりや、ひとにたよつていちやだめだ、じぶんの力でしなけりや、と。

### 三

旅の人や、町へゆく人は、しんたのむねの下の椿の木に、賽銭箱のようなものが吊つて  
されてあるのを見ました。それには札がついていて、こう書いてありました。

「ここに井戸を掘つて旅の人にのんでもらおうと思います。志のある方は一銭でも五厘でも喜捨して下さい。」

これは海蔵さんのしわざでありました。それがしようこに、それから五、六日のち、海蔵さんは、椿の木に向かいあつた崖の上にはらばいになって、えにしだの下から首つ

ただだけ出し、人々の喜捨のしやうを見ていました。

やがて半田の町の方からお婆さんがひとり、乳母車を押してきました。花を売って帰るところでしょう。お婆さんは箱に目をとめて、しばらく札をながめていました。しかし、お婆さんは字を読んだのではなかったのです。なぜなら、こんなひとりごとをいいました。「地藏さんも何も無いのに、なんでこんなところに賽銭箱があるのじやろ。」そしてお婆さんは行ってしまいました。

海蔵さんは、右手にのせていたあごを、左手にのせかえました。

こんどは村の方から、しりはしよりした、がにまたのお爺さんがやって来ました。「庄平さんのじいさんだ。あの爺さんは昔の人間でも、字が読めるはずだ。」と、海蔵さんはつぶやきました。

お爺さんは箱に眼をとめました。そして「なにになに。」といいながら、腰をのぼして札を読みはじめました。読んでしまうと、「なるほど、ふふウン、なるほど。」と、ひどく感心しました。そして、懐の中をさぐりだしたので、これは喜捨してくれるなど思っている、とり出したのは古くさい蓑入れでした。お爺さんは椿の根元でいっぷくすって行ってしまいました。

海蔵さんは起きあがって、椿の木の方へすべりおりました。箱を手にとつて、ふつてみました。何の手ごたえもないのでした。

がっかりして海蔵さんは、ふうツと、といきをもらしました。

「けつきよく、ひとは頼りにならんとわかつた。いよいよこうなつたら、おれひとりの力でやりとげるのだ。」

といいながら、海蔵さんは、しんたのむねをのぼつて行きました。

#### 四

次の日、大野の町へ客を送つてきた海蔵さんが、村の茶店にはいつていきました。

そこは、村の人力曳きたちが一仕事して来ると、次のお客を待ちながら、憩んでいる場所になつていたのでした。その日も、海蔵さんよりさきに三人の人力曳きが、茶

店の中に憩んでいました。

店にはいつて来た海蔵さんは、いつものように、駄菓子箱のならんだ台のうしろに仰向けに寝ころがつてうっかり油菓子をひとつ摘んでしまいました。人力曳きたちは、

お客を待つているあいだ、することがないので、つい、駄菓子箱のふたをあけて、油菓子や、げんこつや、ペこしやんという飴や、やきするめや餡つぼなどをつまむのが癖になつていました。海蔵さんもまたそうでした。

しかし海蔵さんは、今、つまんだ油菓子をまたもとの箱に入れてしまいました。見ていた仲間の源さんが、

「どうしただよ、海蔵さ。あの油菓子は鼠の小便でもかかっているだよ。」  
と、いいました。

海蔵さんは顔をあかくしながら、

「ううん、そういうわけじゃねえけれど、きようはあまり喰べたくないだよ。」  
と、答えました。

「へへエ。いつこう顔色も悪くないようだが、それでどこが悪いんだよ。」  
と、源さんがいいました。

しばらくして源さんは、ガラス壺から金平糖を一つ掴みとり出すと、そのうちの一つをぼおいと上に投げあげ、口でぱくりと受けとめました。そして、

「どうだよ、海蔵さ。これをやらんかや。」



といいました。海蔵さんは、昨日まではよく源さんと、それをやったものでした。二人で競争をやつて、受けそこなつた数のすくないものが、相手に別の菓子を買わせたりしたものでした。そして海蔵さんは、この芸当ではほかのどの人力曳きにも負けませんでした。

しかし、きようは海蔵さんはいいました。

「朝から奥歯がやめやがつてな、甘いものはたべられんのだてや。」

「そうかや、そいじや、由さ、やろう。」

といつて、源さんは由さんと、それをはじめました。

二人は色とりどりの金平糖を、天井に向かつて投げあげてはそれを口でとめようとしましたが、うまく口にはいるときもあれば、鼻にあたりたり、たばこぼんの灰の中にはいつたりすることもありました。

海蔵さんは、じぶんがするなら、ひとつもそらしはしないのだがなあ、と思ひながら見ていました。あまり源さんと由さんが落としてばかりいると、「よし、おれがひとつやつて見せてやろかい。」といつて出たくなるのでしたが、それをがまんしていました。これはたいへんつらいことでありました。

はやく、お客がくればいいのになあ、と海蔵さんは眼をほそめて明るい道の方を見ていました。しかしお客よりさきに、茶店のおかみさんが、焼きたてのほかほかの大餡巻をつくってあらわれました。

人力曳きたちは、大よろこびで、一本ずつとりました。海蔵さんもがまんできなくなつて、手が少しうごきだしましたが、やつこのことでおさえました。

「海蔵さ、どうしたじや。一銭もつかわんで、ごっそりたためておいて、大きな倉でもたてるつもりかや。」

と、源さんがいいました。

海蔵さんは苦しうに笑つて、外へ出てゆきました。そして、溝のふちで、かやつり草を折つて、蛙をつつていました。

海蔵さんの胸の中には、拳骨のように固い決心があつたのです。今までお菓子につかつたお金を、これからは使わずにためておいて、しんたのむねの下に、人々のため

の井戸を掘ろうというのでありました。

海蔵さんは、腹も歯もいたくありませんでした。のどから手が出るほど、お菓子はたべたかつたのでした。しかし、井戸をつくるために、今までの習慣をあらためたので

ありました。

五

それから二年たちました。

牛が葉をたべてしまつた椿にも、花が三つ四つ咲いたじぶんの或る日、海蔵さんは半田の町に住んでいる地主の家へやっていきました。

海蔵さんは、もう二ヶ月ほどまえから、たびたびこの家へ来たのでした。井戸を掘るお金はだいたいできたのですが、いざとなつて地主が、そこに井戸を掘ることをしようちしてくれないので、何度も頼みに来たのでした。その地主というのは、牛を椿につないだりすけ利助さんを、さんざん叱つたあの老人だつたのです。

海蔵さんが門をはいつたとき、家の中から、ひえつというひどいしゃつくりの音がきこえて来ました。

たずねて見ると、一昨日から地主の老人は、しゃつくりがとまらないので、すつかり体がよわつて、床についているということでした。それで、海蔵さんはお見舞いに枕

もとまでできました。

老人は、ふとんを波うたせて、しゃつくりをしていました。そして、海蔵さんの顔を見るとき、

「いや、何度お前が頼みにきても、わしは井戸を掘らせん。しゃつくりがもうあと一日つづくど、わしが死ぬそうだが、死んでもそいつは許さぬ。」  
と、がんこにいいました。

海蔵さんは、こんな死にかかった人と争つてもしかたがないと思つて、しゃつくりにきくおまじないは、茶わんに箸を一本のせておいて、ひといきに水をのんでしまうことだと教えてやりました。

門を出ようとすると、老人の息子さんが、海蔵さんのあとを追つてきて、

「うちの親父は、がんこでしようがないのですよ。そのうち、私の代になりますから、そしたら私があなたの井戸を掘ることを承知してあげましょう。」  
といいました。

海蔵さんは喜びました。あの様子では、もうあの老人は、あと二、三日で死ぬに違いない。そうすれば、あの息子があとをついで、井戸を掘らせてくれる、これはうまいと

おも  
思いました。

その夜、夕飯のとき、海蔵さんは年とつたお母さんに、こう話しました。

「あのがんこ者の親父が死ねば、息子が井戸を掘らせてくれるそうだがのオ。だが、ありや、もう二、三日で死ぬからええて。」

すると、お母さんはいいました。

「お前は、じぶんの仕事のことばかり考えていて、悪い心になつただな。人の死ぬのを待ちのぞんでいるのは悪いことだぞや。」

海蔵さんは、とむねをつかれたような気がしました。お母さんのいうとおりだったのです。

次の朝早く、海蔵さんは、また地主の家へ出かけていきました。門をはいると、昨日より力のない、ひきつるようなしやつくりの声が聞こえて来ました。だいぶ地主の体が弱つたことがわかりました。

「あんたは、また来ましたね。親父はまだ生きていますよ。」  
と、出て来た息子さんがいいました。

「いえ、わしは、親父さんが生きておいでのうちに、ぜひおあいしたいので。」

と、海蔵さんはいいました。

老人はやつれて寝ていました。海蔵さんは枕もとに両手をついて、

「わしは、あやまりに参りました。昨日、わしはここから帰るとき、息子さんから、あなたが死ぬば息子さんか井戸を許してくれるときいて、悪い心になりました。もうじき、あなたが死ぬからいいなどと、恐ろしいことを平気で思っていました。つまり、わしはじぶんの井戸のことばかり考えて、あなたの死ぬことを待ちねがうというような、鬼にも嬉しい心になりました。そこで、わしは、あやまりに参りました。井戸のことは、もうお願いしません。またどこか、ほかの場所をさがすとします。ですから、あなたはどうぞ、死なないで下さい。」

と、いいました。

老人は黙ってきいていました。それから長いあいだ黙って海蔵さんの顔を見上げていました。

「お前さんは、感心なおひとじや。」

と、老人はやつと口を切っていました。

「お前さんは、心のええおひとじや、わしは長い生涯、涯じぶんの慾ばかりで、ひとのこ

となどちつとも思わずに生きて来たが、いまはじめてお前さんのりっぱな心にうごかさ  
 た。お前さんのような人は、いまだき珍しい。それじゃ、あそこへ井戸を掘らしてあげよ  
 う。どんな井戸でも掘りなさい。もし掘つて水が出なかつたら、どこにでもお前さんの好  
 きなところに掘らしてあげよう。あのへんは、みな、わしの土地だから。うん、そうして、  
 井戸を掘る費用がたりなかつたら、いくらでもわしが出してあげよう。わしは明日にも死  
 ぬかも知れんから、このことを遺言しておいてあげよう。」  
 海蔵さんは、思いがけない言葉をきいて、返事のしようもありませんでした。だが、  
 死ぬまえに、この一人の慾ばりの老人が、よい心になつたのは、海蔵さんにもうれし  
 いことでありました。

## 六

しんたのむねから打ちあげられて、少しくもつた空で花火がはじけたのは、春も末に近  
 いころの昼でした。

村の方から行列が、しんたのむねを下りて来ました。行列の先頭には黒い服、

黒と黄の帽子をかむつた兵士が一人いました。それが海蔵さんでありました。

しんたのむねを下りたところに、かたがわには椿の木がありました。今は散って、浅緑の柔らかい若葉になっていました。もういつぼうには、崖をすこしえぐりつつ、そこに新しい井戸ができていました。

そこまで来ると、行列がとまってしまいました。先頭の方海蔵さんがとまったからです。学校かえりの小さい子供が二人、井戸から水を汲んで、のどをならしながら、美しい水をのんでいました。海蔵さんは、それをにこにこしながら見ていました。

「おれも、いつばいのんで行こうか。」

子供たちがすむと、海蔵さんはそういつて、井戸のところへ行きました。

中をのぞくと、新しい井戸に、新しい清水がゆたかに湧いていました。ちょうど、そのように、海蔵さんの心の中にも、よろこびが湧いていました。

海蔵さんは、汲んでうまそうにのみました。

「わしはもう、思いのこすことはないがや。こんな小さな仕事だが、人のためになることを残すことができたからの才。」

と、海蔵さんは誰でも、とつつかまえていいたい気持ちでした。しかし、そんなことは



いわないで、ただにこにこしながら、町の方へ坂をのぼって行きました。

日本とロシアが、海の向こうでたたかいはじめていました。海蔵さんは海をわたって、そのたたかいの中にはいつて行くのであります。

## 七

ついに海蔵さんは、帰って来ませんでした。勇ましく日露戦争の花と散ったのです。しかし、海蔵さんのしをした仕事は、いまでも生きています。椿の木かげに清水はいまもこんこんと湧き、道につかれた人々は、のどをうるおして元気をとりもどし、また道をすすんで行くのであります。



# 青空文庫情報

底本：「少年少女日本文学館第十五巻 ごんぎつね・夕鶴」講談社

1986（昭和61）年4月18日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第13刷発行

入力：田浦亜矢子

校正：もりみつじゅんじ

1999年10月25日公開

2009年1月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 牛をつないだ樁の木

新美南吉

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>